

結論：超急性期 SPECT は皮質枝領域の complete stroke 症例の責任病巣の診断・治療法の選択に有用であった。

1A-15) 脳出血における脳血流量の経時的变化
—持続動脈採血法による ¹²³I-IMP
SPECT により—

上田 幹也・林 征志
森永 一生・松本 行弘
大宮 信行・三上 淳一
佐藤 宏之・井上 慶俊 (大川原脳神経外科)
大川原修二 病院

目的：脳出血33例について脳血流量 (CBF) の経時的变化について検討すること。

対象・方法：対象となった被殻・視床・尾状核・皮質下・小脳・脳幹出血はそれぞれ16・8・1・4・2・2例で、血腫吸引術などの外科的治療を8例に施行し、残り25例は保存的治療を行った。CBF は ¹²³I-IMP を用い持続動脈採血法により定量的に測定し、発症1週間以内 (急性期)・2週前後 (亜急性期)・1カ月後・3カ月後に行った。

結果：保存的治療を行った被殻出血11例では急性期と比較し、亜急性期に CBF は有意に低下し1カ月後有意に回復した。この際平均動脈血圧は急性期と比較し亜急性期・1カ月後は有意に低下していた。治療法にかかわらず他の脳出血においても保存的治療を行った被殻出血と同様の CBF の経時的变化を認めた。

結論：治療法にかかわらず亜急性期で最も CBF は低下し、その機序として血腫およびその周囲の脳浮腫による微小循環の障害および脳血流自動調節能障害下における脳灌流圧の低下が考えられた。

1A-16) DIAMOX 負荷時にみられる各種脳血流 SPECT (IMP, ECD, HM-PAO) 所見の乖離について

関 隆史・中川原 謙二
奥村 智吉・妹尾 誠
安斎 公雄・池田 政彦
早瀬 一幸・橋本 潔 (中村記念病院)
中村 順一 (脳神経外科)
末松克美 (財)北海道脳神経疾患研究所

目的・方法：脳虚血発作で発症した閉塞性脳血管障害例8例を対象として、同時期に DIAMOX 負荷時の ¹²³I-IMP, ^{99m}Tc-ECD, ^{99m}Tc-HM-PAO SPECT を施行し、それらの所見にどの程度の乖離が生ずるかについて検討した。脳血管拡張能の低下の程度は、健常部と

比較して中等度以上：Gr. II, 軽度：Gr. I, ごく軽度～なし：Gr. O と評価した。いずれの症例も DIAMOX 負荷 IMP-SPECT にて責任病変の灌流域は Gr. II であった。

結果：IMP-SPECT で Gr. II と評価された8領域は ECD-DPECT では Gr. II : 3, Gr. I : 5, Gr. O : 0, HM-PAO SPECT では Gr. II : 2, Gr. I : 3, Gr. O : 3 領域に分類された。また、IMP と ECD との比較では3例が同程度、5例が ECD で過小に評価され、ECD と HM-PAO との比較では、4例が同程度、4例が HM-PAO で過小評価となった。

結論：^{99m}Tc 標識脳血流トレーサーを用いた DIAMOX 負荷 SPECT では、IMP に比較して局所脳血管拡張能 (脳循環予備能) の低下が過小評価されることに注意が必要である。

1A-17) Direct CCF の塞栓術前後の SPECT 所見の検討

朴 永俊・高橋 明 (広南病院血管内)
藤井 康伸・江面 正幸 (脳外科)
溝井 和夫・甲州 啓二 (同 脳外科)
吉本 高志 (東北大学脳研脳神経外科)

目的：direct CCF の塞栓術に伴う SPECT 所見を検討し特に術前後の管理に役立つと思われる結果を得たので報告する。

方法：対象は塞栓術前後に SPECT を施行した7例の direct CCF (外傷性5例特発性2例)である。術後全例で瘻孔は閉鎖し、うち3例は IC を共に閉塞した。

結果：術前安静時の患側 CBF の低下が steal 及び皮質静脈への逆流の著明な2例で認められた。この2例では術後 CBF の改善が見られた (うち1例は IC 閉塞)。バルーンマタス試験を行った5例中安静時正常の2例で患側 CBF の低下が認められた。IC を閉塞した3例は臨床症状は良好であったが、術前 steal や皮質静脈への逆流が少なかった2例で術後安静時又は diamox 負荷時に患側 CBF の低下が認められた。

結論：direct CCF 塞栓術前後のバルーンマタスを含む SPECT 検査は患者管理に有効であった。IC を温存できない例の術前評価としては更に工夫が必要である。